

オープニングセレモニー ヴィオラ演奏

Opening Ceremony - Viola Performance

ヴィオラ奏者
violist

長石 篤志 氏

Nagaishi Atsushi



演者プロフィール Performer Profile

大分県出身。大分県立杵築高等学校卒業。4歳よりヴァイオリンを始め、第24回及び第27回大分県音楽コンクールで第1位を受賞。福岡教育大学芸術コース卒業、同大学院卒業。フィレンツェへの留学を機にヴィオラへ転向。フィエーゾレ音楽院にてアントネッロ・ファルツリに師事する。帰国後は東京に拠点を移し、全国各地のオーケストラの客演首席奏者を務める。題名のない音楽会などのテレビ出演や、高嶋ちさ子「ゆかいな音楽会」メンバーとして、また硬派弦楽アンサンブル「石田組」組員として全国各地で演奏を行っている。ヴァイオリンとヴィオラの「デュオでゆお」メンバー。日本クラシック音楽コンクール全国大会審査員を務めた。

曲目紹介 Programme Introduction

「荒城の月」 (瀧廉太郎作曲・深川甫編曲)

この曲は大分出身の瀧廉太郎が作曲した歌曲「荒城の月」を深川甫によって編曲されたものである。尺八や琴をイメージした奏法を用いることで、ヴィオラの可能性や魅力を十分に発揮できる曲になっている。ヴィオラとピアノのために編曲されたものだったが、今回の為にヴィオラソロ用に再編曲された。

第1部 基調講演

Session 1: Keynote Address

「ルイス・デ・アルメイダの 旅とその生涯」

The Journey and Life of Luís de Almeida

講師 Lecturer

東京大学史料編纂所准教授

Associate Professor, Historiographical Institute,
The University of Tokyo

岡 美穂子 氏

Oka Mihoko

1974年、神戸市生まれ。京都大学大学院博士課程修了。博士(人間環境学)。現在、東京大学史料編纂所准教授。専攻は中近世移行期の対外関係史、キリシタン史。著書に『商人と宣教師－南蛮貿易の世界－』(東京大学出版会、2010年)、『海からみた歴史－シリーズ東アジア海域に漕ぎ出す 第1巻』(羽田正総編集、2012年、東京大学出版会)、『A Maritime History of East Asia』(羽田正との共編、京都大学学術出版会、2019年)、『大航海時代の日本人奴隷-増補新版』(ルシオ・デ・ソウザとの共著、中公選書、2021年)など。



Summary

In mid-16th-century Japan, contact with Europeans enabled the country to expand beyond its previously limited East Asian trading sphere, which had primarily focused on China and Korea. Portuguese ships engaged in the Nanban trade brought firearms, silk, and other goods, while at the same time, Christian missionary activities began to play a significant role in the political and economic strategies of Kyushu's *daimyos*.

The Jesuits were at the center of these changes, with the Portuguese missionary Luís de Almeida standing out as a particularly notable figure. He can be said to symbolize the Nanban trade, where merchants and missionaries operated as interlinked forces.

By examining Jesuit historical sources, including published works and manuscripts, we can gain a better understanding of how foreign trade became closely intertwined with missionary activities and politics at the time.

In this report, I will provide an overview of Almeida's activities in Japan, focusing on his relationship with Otomo Sorin and contributions to the spread of Christianity in Kyushu under Sorin's authority.

ルイス・デ・アルメイダの旅と生涯

16世紀中頃、日本列島は史上初めてのヨーロッパ人との接触を通じて、中国や朝鮮との通商通交を主とする伝統的な東アジア交易圏から脱却しつつあった。ポルトガル人の南蛮船による交易は、火器や火薬の材料、絹、陶磁器などを大量にもたらした他、キリスト教布教の媒介となり、九州の大名・領主たちの政治・経済戦略に深く関わることとなった。この変革の中心に位置づけられるのが、日本でキリスト教布教の先陣を切ったイエズス会であり、そこで領主との交渉や交易活動など、極めて重要な役割を担ったポルトガル人宣教師のルイス・デ・アルメイダであった。彼が、商人から修道士に転身した人物であったという事実は、商人と宣教師が表裏一体で活動した南蛮貿易の性格を象徴的に物語るものである。

イエズス会史料、とりわけアルメイダ自身の書簡を通じて、彼の活動を追うことで、当時の対外交易が布教、交易、政治が複雑に絡み合う中で運営された過程を明らかにできる。本報告では、主に1560年代のアルメイダの活動を時系列的に概観しつつ、平戸宮ノ前事件、薩摩への派遣、横瀬浦開港といった転機に焦点を当て、アルメイダが大友宗麟の壮大な九州覇権構想の中で活動していた可能性も視野に入れつつ、その功績を考えてみたい。なお本稿では、大友宗麟に関しては、義鎮時代も含めて便宜的に「宗麟」と表記する。

ルイス・デ・アルメイダの生涯： 商人から宣教師への変貌

アルメイダは、1525年頃にポルトガル・リスボンで生まれたと言われる。彼の家系は新キリスト教徒（改宗ユダヤ人）で、異端審問の影が忍び寄る時代背景から、海外への渡航を余儀なくされた可能性が高い。イベリア半島で最初に非キリスト教徒の排斥を始めたスペインと隣国ポルトガルの王室は、代々相互の王妃の輿入れによって歴史的に深い繋がりがあった。スペインで異教徒の異端審問が始まった15世紀末、奇しくもポルトガルの大航海時代を築きつつあったポルトガルのマヌエル王は、スペイン王室から妃を迎えながらも政治的には一定の距離感を維持する方針を採っていた。これにより、スペインの異端審問がポルトガルに導入されるまでに50年ほどの空白があり、その間に多くのユダヤ系スペイン人たちが国境を越えてポルトガルに財産と共に逃避し、ポルトガル大航海時代の世界進出を財政面で支えたと言われる。マヌエル王の死後、ジョアン三世の時代になると、その王妃カタリーナ（スペイン王カルロス5世の妹）の影響もあり、16世紀半ばに遂に、ポルトガルにも異端審問と異教徒の排斥運動

が持ち込まれた。それと同時に、リスボンから多くのユダヤ系スペイン人、ポルトガル人が新大陸やアジアへと旅立っていった。

アルメイダ自身は、医学とラテン語に通じ、若い頃から商才を発揮した。1540年代後半からアジア交易に身を投じ、東南アジアのマラッカやインドのゴアを拠点に活動し、1552年、平戸に商人として初来日したと考えられる。

アルメイダの人生は1555年に転機を迎えた。インドから日本布教巡察に訪れたメルシオール・ヌーネス・バレットの知遇を得たアルメイダは、おそらくバレットの影響で、豊後府内においてイエズス会入会を決意した。それ以前のアルメイダは1551年から1555年にかけて、日本中国沿岸＝マラッカを往来するポルトガル人の大商人ドゥアルテ・ダ・ガマのグループで船長として東南アジアー日本航路を往来していた。この頃のポルトガル人の日本での交易拠点は平戸であり、この海域のポルトガル人たちの動きは「後期倭寇」のそれと重なるものであった。豊後府内で布教に従事し始めたアルメイダは、船の入港の知らせを聞きつけて平戸へ急行する生活が続いた。

入会に際し、彼は自身の全財産を寄付した。この寄付は、当時維持費用に欠いていた日本でのイエズス会の礎を構築する貴重な財源となる。アルメイダは自身の財産を喜捨するにとどまらず、その一部を知人に託して、日本で売るための海外商品の購入に充てることにした。それが南蛮貿易にイエズス会が携わるきっかけとなり、この連携は宣教師たちが江戸幕府の追放令によって国外退去（1614年）となった後も、延々と続いたのである。

日本におけるイエズス会の活動の中心は、長崎が対外貿易港として整備される頃まで豊後府内であり、長崎開港後も、宗麟の存命中は、その庇護と影響力を求めて、豊後府内は拠点であり続けた。アルメイダは修道士として九州各地で布教に専念する傍ら、豊後府内では医療と慈善事業にも従事した。豊後府内の病院創設（1557年頃）時には外科治療を担当し、内科や漢方薬の調合を日本人で元僧侶の修道士に委ねている。また、育児院の設立は、戦乱により捨て子や孤児が多く発生していた日本社会の中に、従来存在しなかった社会福祉の実践を持ち込んだ点で、極めて斬新であった。

交易に関心を持つ大名たちからキリスト教布教の庇護を得るために「南蛮貿易」が大いに活用される方針は、明らかにアルメイダが推進し定着したものである。アルメイダはほぼすべての交易活動に携わっており、ポルトガル船が入港するたびにミサ用のワインやオリーブオイルを依頼していたリストなどもある。1570年頃からは天草河内浦を拠点とし、

それまでの功績に対して巡察師アレッサンドロ・ヴァリニャーノの評価を受け、1580年にマカオで遂に司祭に叙階された。帰国後は天草のイエズス会施設周辺に隠棲し、1583年に死去している。彼の生涯は、単なる宣教師の軌跡ではなく、キリスト教布教基盤と南蛮貿易の拡大を支え、16世紀後半からのおよそ100年間、日本と世界が密接に繋がった一時代の最重要人物の一人であったと言える。

平戸宮ノ前事件

前述のように、16世紀中頃の日本におけるポルトガル人の主な活動拠点は平戸であり、イエズス会士たちも当初は平戸で松浦氏との円滑な関係構築に努めていた。しかしながら平戸ではたびたび松浦氏の家臣とポルトガル人の間で対立が起こり、ついに1561年、「平戸宮ノ前事件」が起きた。この事件は、平戸においてフェルナン・デ・ソウザ船長ら14名が松浦氏の家臣らにより殺害されたもので、交易利権をめぐる緊張関係の果てのことであった。従来の研究では事件を1561年8月と特定してきたが、筆者はアルメイダの書簡分析により、実際には9月中旬以降の発生と結論づけている。この事件は、平戸からポルトガル船が離れる契機となった（従来、この事件により平戸入港が絶えたと言われることもあるが、実際にはこの後も何度か入港があった）。いずれにしても、平戸への安全な港としての信頼が揺らぎ、ポルトガル船の入港地が大村領の横瀬浦（長崎県東彼杵郡）へ移行するきっかけとなったのは間違いない。しかし、同時期に薩摩の島津氏が交易を誘致しようとした事実や、1563年に平戸交易がいったん復活したことは、しばしば等閑視されてきた。

1557年、平戸では司祭ガスパール・ヴィレラが、松浦氏の重臣で、生月島、度島の領主であった籠手田安経らを領民1500人と合わせて改宗していた。籠手田氏はポルトガル船との交渉を担う人物であり、熱心なキリシタンであったことがアルメイダ書簡からも確認される。イエズス会士たちは従来の仏教寺院から仏像を除去し、教会に転用したこともアルメイダ書簡に記される。

1558年、アルメイダは豊後府内や朽網（大分県竹田市）において布教や医療活動に従事していた。翌年、宗麟が博多の息浜沿いの広い土地をイエズス会に寄進している。そこでは住民が納める租税の他に、停泊する船からの津料なども納入された。税収入のある土地の寄進は、大村領の横瀬浦に先駆けている点で、宗麟の先見性が伺える。この年、平戸担

当のヴィレラが畿内へ異動し、アルメイダ同様、元商人であるゴンサロ・フェルナンデス修道士が平戸で布教を担当することとなった。フェルナンデスは豊後でイエズス会に入会し、布教や病院に必要なものを整えるために中国に直接買い付けに出向くこともあった。

フェルナンデスがゴアに旅立った後、アルメイダは平戸での布教事業のサポートを命じられ、1561年5月22日、博多経由で平戸へ出発した。途中の博多で町人60～70名を改宗し、末次興膳の協力を得て、息浜に教会を造作している。6月末には、度島・生月島に到着し、高台に海上からも見えるように十字架を設置した。平戸にはカピタン・モールの船を含む5隻が入港しており、アルメイダは教会用の聖画や装飾具を入手している。そこでポルトガル人商人の協力を得て、5～6か所の教会を修繕した。生月島から平戸島の獅子、飯良、春日へ移動し、平戸では約90名のポルトガル人と交流している。松浦隆信に城下での教会設置を交渉したが、難航を極めた。布教長コスメ・デ・トルレスは「平戸領主が豊後の王に服従したため、安全は保障された」と記すが、松浦氏と大友氏の関係性はそれほど単純なものではなかった。

1561年の平戸に関するアルメイダの書簡では、ポルトガル人と日本人の友好的な交流が詳細に描かれる。特に聖口ウレンソの祝日（8月10日）には、カピタン・モールの船が祝砲を放ち、船上で宴が催された。この時点では、日本人とポルトガル人商人たちの交流が友好的に描かれている。しかし、先述の「平戸宮ノ前事件」はこの直後に発生している。

事件はアルメイダが豊後府内に帰還した後の9月中旬以降に発生し、10月1日付でアルメイダが書簡を作成した時も、豊後府内にその情報は届いていなかった。事件の要因としては、キリシタンに改宗した籠手田一族が交易の主導権を握ったことで、旧来の交易利権を掌握していた勢力の不満が爆発したものと考えられる。2年前の1559年にも前哨的な衝突があり、この事件は平戸の旧来の交易勢力と新規の勢力の対立が背景にあると考えられる。平戸宮ノ前事件以後、ポルトガル船の入港は大村領の港や有馬領の口之津などに転移し、対外貿易拠点の分散化が進んだ。

島津貴久のポルトガル船招致

平戸から豊後に戻ったアルメイダは、布教長コスメ・デ・トルレスの命令により、島津貴久との交渉のために薩摩へ派遣されることになった。その背景には同年11月に、薩摩の坊津

に入港していたポルトガル人船長マヌエル・デ・メンドンサー行が豊後を訪問し、布教長トルレスに薩摩領内での布教開始を依頼し、島津貴久がインド副王への外交書簡作成を望む意向を伝えたことがある。平戸宮ノ前事件に関する情報の拡散(10月頃?)が、島津氏の行動を促した可能性が高く、薩摩にいたメンドンサを貴久が豊後に派遣したものと推測される。この動きは、平戸が対外貿易港として不安定となった状況が、九州の他の大名たちに南蛮貿易の好機到来を意識させたものであったろう。と同時に、メンドンサの島津氏との交流はその年に限ったことではないと考えられ、ポルトガル人の私貿易商人の中には、平戸ではなく、1540年代同様、薩摩の港に來航して交易する者も少なくなかったようである。同年12月、トルレスはアルメイダを薩摩へ派遣することにし、イエズス会の修院で育った日本人の若者(おそらく大内家家臣の遺児ジョアン・デ・トルレス)を伴わせた。この薩摩への旅は、各地への滞在も合わせて約6か月に及ぶものであった。そのルートは詳細に記され、以下のようなものであった。

豊後府内(12月)出発→朽網(竹田市直入)→(陸路)→肥後高瀬(船で薩摩を目指す、逆風で見知らぬ土地に着岸、領主は大友家臣の赤星統家か?)→海路3日間→阿久根→海路3時間→京泊港(薩摩川内、市来まで2レグアの山道)→市来城→(陸路)→鹿児島→(陸路)→加世田→(陸路)→坊津→(陸路で17日間)→豊後府内(1562年6月帰着)。

イエズス会の宣教師たちは九州内を頻繁に移動したが、主な利用ルートは海路ではなく陸路であった。とくに肥前と豊後の往来では肥後高瀬(現在の熊本県玉名市)が主要な中継地となっており、要所で河川交通(川下り)が利用されながらも、肥後高瀬と豊後府内の間は基本的に陸路が利用された。肥後高瀬はこの時期大友氏の飛び地領であり、その影響下にあったため、宣教師にとっても安全性が確保され得るものであった。いずれにしても山地を徒歩または馬で往くことが多く、街道を歩く厳しい旅であった。トルレスがアルメイダを派遣した目的は、島津貴久による布教保護の意志を直接確認することと、貴久のインド副王への外交書簡の内容を協議することにあった。メンドンサは島津貴久の署名入り白紙2枚をトルレスに託し、インド副王・イエズス会インド管区長宛の代筆を依頼した。この時期、イエズス会は九州政情の不安定さを認識しており、未入信の宗麟との関係も絶対的なものではなかった。宗麟は島津氏と良好関係を保ちつつ

も、中国地方の毛利氏と結んだ筑前・筑後の反抗勢力や佐賀の龍造寺氏の脅威に直面していた。さらには肥前の小領主・国人層も絶え間ない戦乱状態にあり、貴久の下で一応統一されていた大隅・薩摩を治める島津氏と友好な関係を結ぶことは、イエズス会のみならずポルトガル人商人たちからも期待されていたと考えられる。

薩摩でのアルメイダ

肥後高瀬からは海路で薩摩方面へ向かったアルメイダは、途中で阿久根在住のポルトガル人船長アフォンソ・ヴァスを訪ねた。ヴァスは日本人の女性召使いとの間に2人の子をもうけ、日中間の交易を私船でおこなっていたと考えられる。ヴァスはアルメイダを出水領主の島津晴久(島津薩州家棟梁、のちの義虎)に引き合わせており、島津家でも知られた人物であった。アルメイダがヴァスのもとを去った直後に、中国人海賊の襲撃でヴァスは死亡している。阿久根の浜からは16世紀ポルトガルのもので推定される仏郎機砲が出土しており、ヴァスの船に搭載されていたものである可能性が高い。

アルメイダは市来に立ち寄り、領主の新納康久他家臣団にキリスト教を説き、領主の妻らが改宗した。市来ではフランシスコ・ザビエルが家老(市来のミゲル)に洗礼を受けており、その後も信仰を維持していたが、宣教師との接触がなかったため、ほぼ民間信仰化していたことをアルメイダは観察している。アルメイダは、老婆がザビエルが残した祈祷文入りの守り袋で人々の病気を治癒しようとする姿を観察し、指導者不在時のキリシタンの変容を目の当たりにした。これは、後の日本キリスト教の土着化モデルを予見させるものである。鹿児島では福昌寺住持忍室(ザビエルとの対談で有名)の元を訪れたが、忍室は「通訳の能力が不十分でザビエルの話がほとんど理解できなかった」と告白した。従来の研究では、忍室とザビエルが通訳のアンジローを介して十分に意思疎通が取れたと考えられてきたが、このアルメイダ書簡の忍室に関する箇所は、日本では知られておらず、ザビエルの布教の実態について新しい真実を物語るものである。



阿久根の
フランキ砲

横瀬浦開港—

大友氏の戦略的誘導と九州北部同盟の構築

1562年6月、薩摩から豊後府内へ帰還後わずか1か月で、アルメイダは大村領の横瀬浦へ派遣されることになった。これは大村純忠のキリスト教への改宗を条件とした横瀬浦への南蛮船の誘致という大胆な野望によるものであった。旅のルートは豊後府内→(陸路5日間)→日田または秋月→博多→平戸(7月12日到着)→(海路3日間)→横瀬浦、というものであった。アルメイダが横瀬浦に到着した際、平戸からイエズス会関係者の手で導かれたペドロ・バレット(カピタン・モール)の船がすでに入港しており、交易の機運が高まっていた。交渉条件は全住民の改宗と諸税の免除であったが、大村純忠は即答を避け、交渉役に重臣の朝長純利を指定した。兄弟の朝長純安が滞在先を提供し、後日、横瀬浦半分をイエズス会の知行として寄進することが純忠側から提案された。当初の条件は、横瀬浦の全面的な譲渡であったため、アルメイダはトルレスに諮るため結論を保留した。ところが8月初旬、トルレスが病気を患って突如横瀬浦に到来した。トルレスは宗麟から純忠へ宛てた書状を持参しており、それを読んだ純忠がイエズス会の要求条件に合意している。つまり大村純忠の合意は、少なからず宗麟の意向が反映されたものであったことは明らかである。では、なぜ豊後の反対側に位置する大村領の開港が宗麟にも望ましいことであったのだろうか？

南蛮貿易で日本に輸入される品々(鉛、硝石などの軍需品、生糸・絹織物、陶磁器等)の一部は陸路で九州を横断し、博多ないし豊後府内から瀬戸内海経由で上方(京都・堺)へと運ばれていた。九州の東西を横断するルートは次のようなものであった。

ルート1: 彼杵半島→有明海→肥後高瀬→筑後(久留米)→秋月→日田→由布→豊後府内(国道210号線相当)。

ルート2: 彼杵半島→有明海→肥後高瀬→阿蘇→豊後南郡→豊後府内(国道57号線相当)。

肥後高瀬がこれらのルートの要所であり、宗麟も南蛮船がもたらした「石火矢(大砲)」を肥後高瀬から臼杵まで陸路で運ばせたことが知られている(1576年)。どちらのルートを採用かは、その時々の方の政情の影響を受けた。たとえば、博多の豪商で長崎代官となった末次家が秋月に拠点を置いていたことを考えれば、ルート1の方が利用度が高かった可能性も考えられるが、豊後南郡には有力者である朽網氏や志賀氏はじめキリシタンが多かったから、南郡を通るルート2も、大

友氏と島津氏の関係が悪化し、国境の状況が不安定になる1577年頃まではある程度利用されたと考えられる。

大村純忠が横瀬浦を開港したのと同時期に、島津氏がイエズス会経由の船誘致を積極化しており、純忠の迅速な決断がなければ、薩摩の港が平戸に代わる代替港となった可能性が高い。宗麟の構想は、南蛮貿易を大村領に誘致し、その交易に関わる機会を供与することで、龍造寺に拮抗する肥前・筑前・筑後の国人・小領主を大友陣営へ取り込もうとしたものではなかったかと考える。横瀬浦開港は、こうした政治的な利権の絡むものであり、それは後に続く長崎の原型となった。



現在の横瀬浦

横瀬浦から長崎開港まで

その後、横瀬浦は純忠の敵である後藤貴明(純忠養父の非嫡出子)と豊後商人らに襲撃され、放火で町が全焼している。これによりマカオから来航したポルトガル船は平戸に入港した。1565年正月、アルメイダは豊後を発って、ルイス・フロイスと共に瀬戸内海を経て上洛し、堺に滞在後、奈良と京都を巡り、成熟した文化に感銘を受けたようである。この旅の主目的は堺商人との商談であったが、フロイス帰還後、アルメイダは新たな港である大村領福田へと向かった。1566年前半、アルメイダは平戸、口之津、五島福江、志岐、福田を移動しており、志岐で志岐麟泉を受洗に導いた。横瀬浦焼失の後に開かれた福田にポルトガル船が入港した際、アルメイダも同地に到着した。同時期、平戸の籠手田軍が五島福江を襲撃し、沿岸部領主間の緊張が高まっていた。同年冬、アルメイダは臼杵に宗麟の依頼で司祭館を建設している。

1567年、福田が外洋に面する港で、必ずしも良港とは言えなかったため、アルメイダは新たな大村領の港を調査すべく沿岸部を探索し、長崎を良港と判断した。1568年には天草の志岐に滞在し、1569年には天草鎮尚を訪れ、領民700名を改宗した。直後に鎮尚の兄弟の反乱が起きた際、宗麟は鎮尚に受洗を勧める書状を送った。その思惑は不明である

が、宗麟はイエズス会との厚誼により鎮尚の軍備拡充が可能であると伝え、さらにはキリスト教信仰で結ばれた同盟を強固にする目論見もあったのではないかと考える(この時点で宗麟は未受洗)。この年、アルメイダは日田、秋月、博多(？)、山口、豊後、肥後高瀬、大村を精力的に往復し、宗麟や山口の大内輝弘、秋月種実らと面会し、大友氏と龍造寺氏との対立が激化する中、大友・大村・有馬・天草・相良による同盟形成のために奔走していた様子を伺うことができる。アルメイダは宗麟の「使僧」として、外交の要役を果たしていた可能性が高い。



ポルトガル船の寄港地

1570年6月、フランシスコ・カブラルがトルレスに代わる布教長として志岐に來日し、布教区会議を開催し、日本布教での諸事を決定した。同年10月2日、トルレスが死去し、志岐に埋葬された。1571年、アルメイダは天草にカブラルや日本人修道士ヴィセンテ洞院と滞在している。1572年10月5日、天草の住院で書簡を執筆し、病状の悪化や通訳によるキリスト教の偽信仰が蔓延し始めた騒動を記した。以後、彼の活動は次第に不透明となる。おそらくアルメイダが赤裸々に日本の諸事情を記すことをカブラルが咎め、ヨーロッパへ書簡を書き送ることを禁じたのではなかったかと推察する。

しかしながら1576年1月31日付けの口之津からの書簡では、有馬領の改宗状況を報告し、同年9月の修道士ミゲル・ヴァスの書簡ではアルメイダが長期で薩摩に移住することになったと伝えられる。1577年、島津氏と大友氏の日向争奪戦(耳川の戦い)が本格化する中、アルメイダは薩摩へ赴き、島津義久の庇護を受けているのは不思議である。1578～1579年、フロイスの「日本年報」にアルメイダの薩摩発書簡が収載されたが、全体的にはアルメイダの書簡は激減し、他の宣教師の書簡でもアルメイダへの言及は見られなくなる。

1579年、巡察師ヴァリニャーノが來日し、アルメイダのそれまでの日本布教における功績が認められ、マカオで司祭叙

階されることが決定した。叙階後、年齢と体調から見ても、そのままマカオに逗留する可能性もあったが、日本に帰国して、天草に居を構えた。

天草アルメイダ
上陸の地

アルメイダの生涯

1583年、アルメイダは天草河内浦の住院で静かにその生涯を閉じた。その遺骸は、今もイエズス会施設跡と言われる信福寺の周辺に眠る。アルメイダは、イエズス会が日本で基盤を築くために不可欠な貿易利益による財務と、それを足掛かりとした諸大名との交渉のほぼすべての局面で主体的な役割を果たしており、日本で活動した多くのヨーロッパ人宣教師の中で、実務家として最重要人物であったと言っても過言ではない。またその活動はイエズス会独自の決定に留まらず、宗麟の意向を受けたものであった可能性が強いことが伺える。アルメイダなくしては、南蛮貿易で日本と世界が結ばれることも、キリスト教が日本に広まることも、それほど円滑には進展しなかったであろう。司祭叙階後、マカオで安らかな余生を選ぶこともできたはずだが、彼は再び天草の土を踏むことを選んだ。それは、遠い異国の地日本とその地の人々への深い愛情の証であったのではなからうか。

【参考文献】

- 松田毅一監訳『16・7世紀イエズス会日本報告集』第3期1～7巻、同朋舎出版、1994～1997年。
 松田毅一・川崎桃太『フロイス 日本史』1～12巻、中央公論社、1977～1980年。
 東京大学史料編纂所『日本関係海外史料 イエズス会日本報告集』原譯文編1～5、1990～2022年。
 Cartas que os padres e irmãos da Companhia de Iesus escreuerão dos Reynos de Iapão & China aos da mesma Companhia da India. Evora, 1596.
 尾原悟編『キリシタン文庫 イエズス会日本関係文書』南窓社、1981年。

第2部 スペシャルコンサート

ー南蛮ぎたるらの世界ー

Session 2: Special Concert - The Way of Namban -

奏者 Performers

MUZIC@NET／マリオネット

日本におけるポルトガルギターのバイオニア・湯浅隆と、マンドリン界をリードする吉田剛士によるアコースティックDUO。ポルトガルギター、マンドリュート、ギター、マンドリンを駆使し、自作自演のオリジナル楽曲を中心に、世界の名曲やポピュラー、日本童謡も含め幅広く活動。その音色は郷愁感に満ち溢れ、ポルトガル大使より「ポルトガルと日本の音楽の最高フュージョン」との評を賜る。結成以来、映画、TV番組テーマ曲、TVCM、バレエ・演劇などの音楽を数多く担当。また、俳優・常田富士男、高倉健、女優・日色ともゑ、竹下景子を始め、パントマイム・清水きよし、歌手・りりィ、石川さゆり、渡辺真知子、グラシェラ・スサーナ、長谷川きよし、中国古箏・伍芳との共演など、様々な分野とジョイント。95年のデビューCD『ぼるとがる幻想』は異例の4万枚のヒット。以降、計15枚のアルバムを発表。楽曲は様々なBGMとして使われている。多数のテレビ・ラジオにも出演（『徹子の部屋』『スタジオパークからこんにちは』など）各地ライブ活動の他、NHK名曲アルバム演奏、NHKラジオ深夜便・深夜便のうた「唐街雨情／歌・グラシェラ・スサーナ／作詞作曲・湯浅隆」（カラオケにも収録）、豪華客船「飛鳥II」ワールドクルーズでのエンタ等も提供。



助演 Supporting Performers

南蛮BVNGOマンドリンオーケストラ

「南蛮文化発祥都市」を掲げる大分市にて、MUZIC@NET／マリオネットによって種をまかれ、2019年に結成されたオーケストラ。吉田剛士が代表を、湯浅隆が特別顧問を務める。地元在住のマンドリン音楽愛好家を中心に構成され、マンドリン合奏を通して「南蛮文化発祥都市おいた」の魅力を発信し、その文化振興に貢献するための活動を模索している。これまで、2020年・2022年に単独コンサートを開催したほか、大分市の主催する「宗麟公まつり」への出演を重ねる。2023年10月から放映中の「大分むぎ焼酎 二階堂」TVCM音楽に、MUZIC@NET／マリオネットのバック演奏で参加。



MUZIC@NET／マリオネットによる曲紹介

Programme Introduction from MUZIC@NET/marionette

「暗いはしけ」(P&G) カコ・ヴェーリョ

1955年、仏映画『過去をもつ愛情』の中で、ファドの女王「アマリア・ロドリゲス」が歌い世界的にヒットし、「FADO」が広く世界に知られる契機になった。私どもはポルトガルギターのインスト演奏で、NHK名曲アルバム(大友直人指揮&東京フィル)を録音した。

「コインブラ」～ポルトガルの4月～(P&G) ラウロ・フェラーオ

世界遺産の街、そしてヨーロッパ最古の大学のあるコインブラを讃える曲。ポピュラー曲としても有名。私どもは、やはりNHK名曲アルバムで東京フィルと共演。

「光の中で」(P&G)or「キンモクセイの頃」(P&ML) 湯浅隆

日本人が「ポルトガルギター(≡「南蛮ぎたるら」)」で弾く「和製オリジナルFADO」への言及を試みた曲。サウダーデ(FADO表現の核心)を、この国の風土を内に落とし込み創作したが、そのセンチメンタリズムは本国ポルトガルでも理解された。マンドリン合奏での編曲版は内外で少なからず演奏されている。

「南蛮渡来」(P&ML) 湯浅隆

清酒・沢の鶴TVCM曲。マカオ政府観光局テーマ曲。1543年、種子島に鉄砲が伝来し西洋と東洋の出会いが「世界史」の表舞台に登場する。その風景を世界で唯一のポルトガルギターとマンドリュートのDUOで表現。この曲の肝は「日本人がポルトガルギターを弾くとはどういうことか?」という問いかけである。「ポルトガルギター」を「南蛮ぎたるら」として再発見した曲でもある。

「南蛮天使アルメイダ」(P&ML) 湯浅隆

2020年、大分市医師会立アルメイダ病院50周年記念曲。冒頭のフレーズはアルメイダが手術をする時に打ち鳴らされたという「鐘の音」をイメージ。曲本編は当時の日本人が初めて見た南蛮人の恐らく奇異であったろう印象と、数奇な運命を生きたアルメイダの複雑な心象風景を重ね合わせて作曲。また、当時最先端であった南蛮渡来の不思議な手術具が並ぶ施術室、そこに漂う薬香(漢方薬が使われていた)、祈りを込めて行われた手術、etc、南蛮(西洋×東洋)の妖気すら漂う神聖さに思いを馳せた。

「南蛮プラネッタ」(M&G&MO) 湯浅隆 吉田剛士

2024年、大分むぎ焼酎 二階堂TVCM曲(2014～2016年に引き続き4回目)今回は「南蛮BVNGOマンドリンオーケストラ」との共演にて録音。

「南蛮舞曲」(MO) 湯浅隆

大分銘菓ぎぶえるTVCM曲。本来はポルトガルギター&マンドリュートで演奏されるが、今回は地元の「南蛮BVNGOマンドリンオーケストラ」の演奏で。

「南蛮BVNGO」(P&ML) 湯浅隆

2017年、大分日本ポルトガル協会設立40周年記念曲として杉村忠彦会長からの依頼を受け作曲。同曲は大分市公式動画サイト『いいやん!大分』で公開中。大友宗麟公の時代(大航海時代)に花開いた南蛮文化に想いを馳せ、当時の豊後府内にぎわいや海外との交流などをイメージして作曲した。ポルトガルギターのテクニクとしては最も多彩な技巧を使っている。

第3部 トークセッション



アルメイダの功績と 人物像から考える 大分の魅力再発見

Session 3: Talk Session

Rediscovering the charm of Oita through
the achievements and character of Almeida

コーディネーター Coordinator



長崎大学多文化社会学部

School of Global Humanities and Social Sciences, Nagasaki University

本城 舞 氏 Honjo Mai

2005年、大分市生まれ。2024年、大分県立大分上野丘高等学校普通科卒業。2017年、小学生6年生の時に「FUNAIジュニア検定」を受検し合格。FUNAIジュニアガイドの1期生となり、大友氏遺跡等でガイド活動を行う。また、高校時代にガイドに活かすために入部した放送部ではNHK杯全国高校放送コンテストに出場するなど多くの実績を残す。現在は、歴史研究者を目指して長崎大学多文化社会学部多文化社会学科オランダ特別コースで日蘭交流史を学んでいる。来年はオランダのライデン大学に1年間の留学を予定している。



大分市教育委員会文化財課専門官

Senior Specialist, Cultural Asset Management Division, Board of Education, Oita City

坪根 伸也 Tsubone Shinya

1963年、佐伯市生まれ。1988年、大分市役所に文化財専門職員として入庁。以来37年にわたり、大分市内の文化財の保護・調査・研究・活用業務に携わる。大分市教育委員会教育部審議監兼文化財課長を経て、2023年より現職。専門は日本考古学。市内各地の遺跡発掘調査を担当。近年の主な著作には「大友氏遺跡の発掘と豊後府内の国際性」(『つなぐ世界史2 近世』清水書院、2023年)、『図説天正遣欧使節』(共著)などがある。趣味は芋焼酎を嗜むことだが、最近はジャパニーズクラフトジンの奥深さにも魅了されている。

パネリスト Panelist



国立大学法人大分大学学長
President, Oita University

北野 正剛 氏 Kitano Seigo

1950年、和歌山県生まれ。1981年、九州大学大学院医学研究科を修了。九州大学医学部付属病院医員、福岡市立第一病院(外科)、ケープタウン大学、済生会八幡総合病院外科部長等を経て、1996年に大分医科大学教授。2011年より現職。専門は消化器外科、内視鏡外科、消化器内視鏡。1990年に西日本でいち早く腹腔鏡下胆嚢摘出術を導入して以降、消化器外科への応用に向け、先頭に立って手技の開発および適応の拡大を図る。国際内視鏡外科連盟・日本内視鏡外科学会理事長。2008年に横浜で開かれた世界内視鏡外科学会では大会会長を務める。



公立大学法人大分県立看護科学大学理事長・学長
Chairperson & President, Oita University of Nursing and Health Sciences

麻原 きよみ 氏 Asahara Kiyomi

1958年、長野県生まれ。1981年、聖路加看護大学衛生看護学部衛生看護学科卒業。1997年、東京大学大学院医学系研究科博士課程修了(保健学博士)。長野県松本市保健師、長野県看護大学助教授、信州大学医学部保健学科教授、聖路加国際大学大学院教授・研究科長等を経て、2024年より現職。聖路加国際大学名誉教授。日本看護系大学協議会副代表理事他。



天草市立キリシタン資料館館長
Director, Amakusa Christian Museum

平田 豊弘 氏 Hirata Toyohiro

1957年、熊本県本渡市(現天草市)生まれ。1981年、本渡市学芸員として文化財保護に従事し、市内各地の発掘調査に携わる。2000年、公文書館設置を担当し、2002年に天草アーカイブズを開館する。2007年、世界遺産登録推進室にて資産の調査・研究、推進業務に従事し、2013年に室長。2018年、「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」の世界文化遺産登録に尽力する。専門は日本考古学、アーカイブズ学。近年の著書に『図説天正遣欧使節』(共著)がある。別府大学非常勤講師。



東京大学史料編纂所准教授
Associate Professor, Historiographical Institute, The University of Tokyo

岡 美穂子 氏 Oka Mihoko

1974年、神戸市生まれ。京都大学大学院博士課程修了。博士(人間環境学)。現在、東京大学史料編纂所准教授。専攻は中近世移行期の対外関係史、キリシタン史。著書に『商人と宣教師ー南蛮貿易の世界ー』(東京大学出版会、2010年)、『海からみた歴史ーシリーズ東アジア海域に漕ぎ出す 第1巻』(羽田正総編集、2012年、東京大学出版会)、『A Maritime History of East Asia』(羽田正との共編、京都大学学術出版会、2019年)、『大航海時代の日本人奴隷-増補新版』(ルシオ・デ・ソウザとの共著、中公選書、2021年)など。



大分市長
Mayor of Oita City

足立 信也 Adachi Shinya

1957年(昭和32年)、大分市上戸次生まれ。筑波大学医学専門学群卒業(医学博士)。きぬ医師会病院診療科長などを経て、1994年(平成6年)、筑波大学臨床医学系外科講師、2003年(平成15年)に筑波大学臨床医学系外科助教授。その後、国立霞ヶ浦病院消化器科医長、筑波メディカルセンター診療部長等を歴任し、2004年(平成16年)に第20回参議院議員選挙(大分県選挙区)に立候補し初当選、その後、2022年(令和4年)まで参議院議員を3期務め、厚生労働大臣政務官、参議院政治倫理の確立及び選挙制度に関する特別委員長、民進党政務調査会長、国民民主党政務調査会長、国民民主党参議院幹事長等を歴任した。2023年(令和5年)に大分市長選挙に立候補し当選、現在1期目。

memo トーク①「アルメイダの功績と人物像について」
Achievements and Character of Almeida

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

memo トーク②「アルメイダの功績を大分の魅力発信に活かすには」
Promoting Oita's Attractions through Almeida's Achievements

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....